

池田光穂・都馬バイカル

モンゴル草原文明研究所の
構想案

1 SDGs 新時代

経済人類学者のクリス・グレゴリーは、1970年代にその隆盛を誇っていた文化経済学や経済人類学における「適応」(adaptation) という用語と概念が、今日ではすっかり色あせ、それに似て非なる「持続可能な」(sustainable) ≡ サステイナブルという言葉が、社会科学研究パラダイムの中で大いに流通していることを指摘しています (Gregory 2005)。

グレゴリーによると、この2つの用語は単なる言葉の言い換え以上の意義があると指摘しています。まず適応という言葉には、「生物学的適応」と「文化的適応」という2つの用法があります。前者はある環境の中で生き残るために生物が個体あるいは集団(群集)の組織を変化させることです。後者の文化的適応とは、ひとつの文化システムが時間を超えて存続するために発展させている社会の諸制度のことです。ところで「持続可能な」という形容詞を名詞化した「持続可能性」(sustainability) にもまた、生態学的意味と経済学的意味の2つの用法があり、それらの意味のニュアンスは微妙に異なっています。昨今のSDGsは、国際協力体制あるいは国内外の政策誘導の文脈で第3番目の意味をもつようになったと言って

◎池田光穂 (いけだ・みつほ)

大阪大学 CO デザインセンター教授・センター長。1956年大阪市生まれ。大阪大学大学院医学研究科博士課程単位取得済退学。専門は文化人類学、医療人類学、中米民族誌学、コミュニケーションデザインなど。著書に『実践の医療人類学』(世界思想社、2001年)、『看護人類学入門』(文化書房博文社、2010年)、『医療人類学のレッスン：病いをめぐる文化を探る』(共編著、学陽書房、2007年)、編著に『認知症ケアの創造』(雲母書房、2010年)、『交錯する世界・自然と文化の脱構築』(共著、京都大学学術出版会、2018年)、『犬からみた人類史』(共編著、勉誠出版、2019年)、『コンフリクトと移民』『暴力の政治民族誌』(大阪大学出版会、2012年/2020年)等。桜美林大学のモンゴル草原で実施する「モンゴル環境研修」(2013年)と「文化人類学フィールドワーク」(2014年)に参加。

◎都馬 バイカル (とば・ばいかる)

桜美林大学教授。1963年、中国内モンゴル自治区シリングル盟正藍旗生まれ。東洋大学大学院博士後期課程修了。文学博士。日本モンゴル学会理事、日本モンゴル協会会員。主な論著：『サイチング研究—内モンゴル現代文学の礎を築いた詩人・教育者・翻訳家』(論創社、2018年)、『スウェーデン宣教師が写した失われたモンゴル』(桜美林大学叢書004、論創社、2021)、『聖書とモンゴル 翻訳文化論の新たな地平へ』(共編著、教文館、2021)、『近代内モンゴルにおけるモンゴル語出版物の歴史：出版社と知識人を中心に』(共著、成文社、2021年)、等。2011年から毎年、モンゴル高原で『モンゴル環境研修』と「遊牧文化フィールドワーク」(2013年から)を実施してきた。